



町民文芸

只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

軟風に軽き音たて静かさを増しゆく山の落葉の溜り

小倉キミ子

孫ほども年の違ひし指導者の声に笑みつつ人ら従ふ

関谷登美子

六十の手習ひとふも八十を過ぎれば覚ゆるよりも忘るる

渡部ゆき子

用なきに受話器をとりて呼びかける雪しまく日の一人居の身は

馬場 八智

溜まりたる疲れに臥せばそここの片付かぬ事脳裏に浮かぶ

新国由紀子

送る蕎麦に合格祈願の守り入れ夫は受験の女孫励ます

古川 英子

人々に髪の乱れを見せざりし亡き女のこと常思ひ出づ

五十嵐夏美

娘に送りし宅急便の受取りを綴る度ごと温き思ひす

目黒 富子

降り続く日々多くして除雪車の朝早くより通る響きす

渡部ヨリ子

夫逝きて幾年経れど店員ら朝々欠かさず香焚きくるる

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一

指導

雪晴れて暮ゆく空の尾根の松

邦 男

冬帽子医の門くぐる人の影

寒晴や砂金とも見ゆパンの屑

順 子

参道にあふれる人や寒椿

信

よく降んなあいさつ交わし雪片し

冬の夜や母は一生母であり
散り散りの家族の揃う松の内

修 一

どこまでも赤城の山は大枯野

都

ほこらしげ園児の口に七草名

水飴の煮つまってきた寒明ける
四温とは雪解ける音聞こえる日

一 穂

モンステラ生命線の長き事

洋 子

桃桜いじめられしが咲きほこる

書初や火の用心を神棚へ
初売のスノーダンプを買いにけり

敦 子

除雪機の掻き上ぐ雪や空の碧

恒 夫

冬晴や鎮守へ消ゆるけもの道

年明くや足入れ婚の宴かな
嬢様かかさまの手料理と知るふくと汁

吉 児

書初や撥ねの勢い賞めながら
風呂吹の先ず大根の素性から

礼